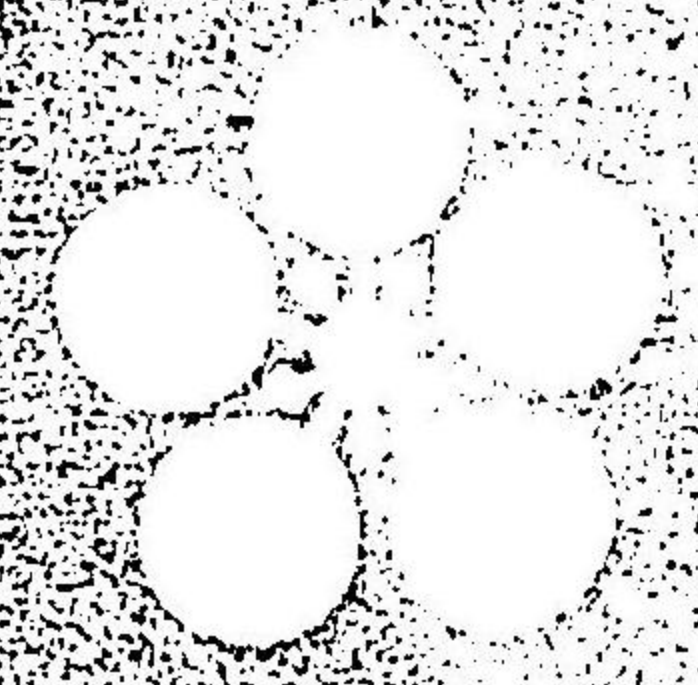
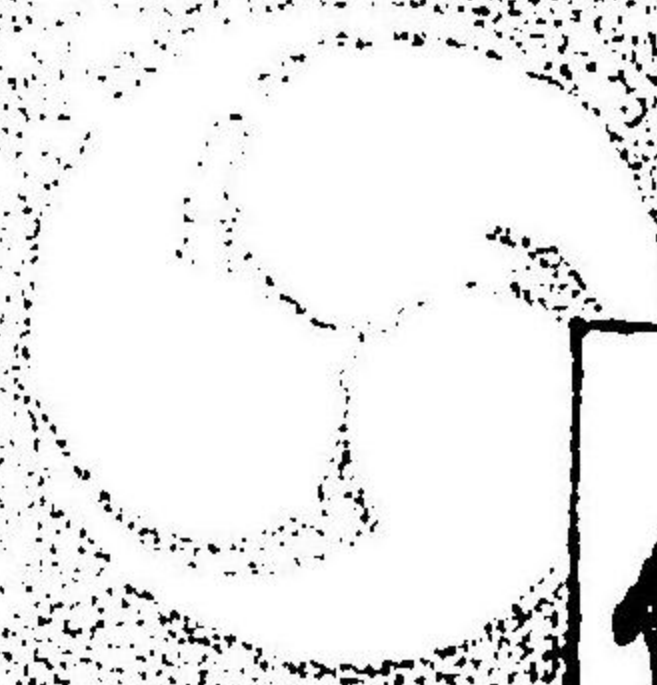


110

191

古今

修學靜山日記



特43  
47

醍醐帝宸筆

敵國降伏

管崎宮神藏

盈謹寫



Handwritten Chinese characters, likely a title or name, located at the top of the page.

Handwritten Chinese characters, likely a date or location, located at the bottom of the page.



Large, bold Chinese characters, possibly a signature or a title, located in the center of the page.

Vertical Chinese characters on the left side of the page, possibly a name or title.



Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

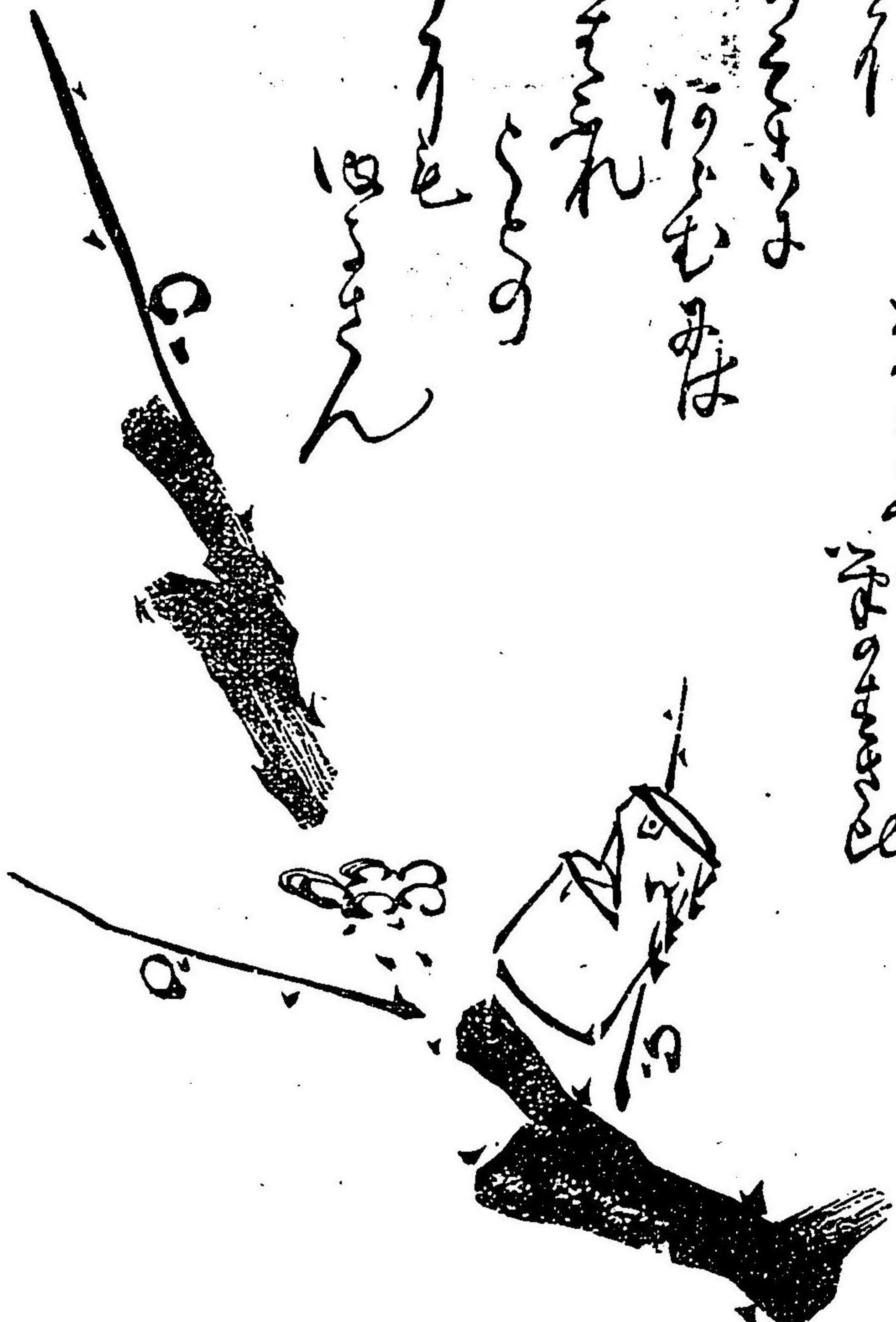
Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

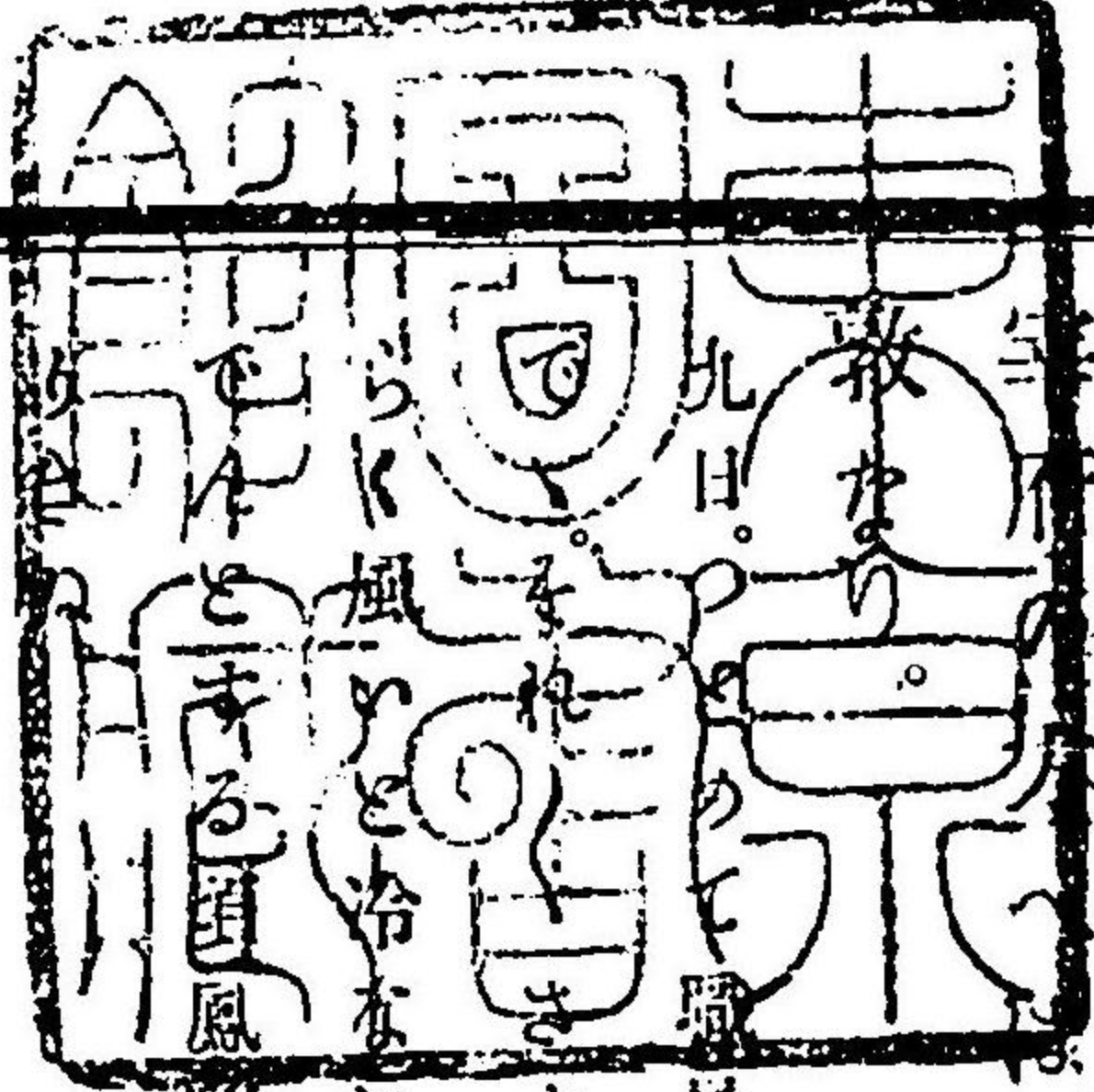
Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.



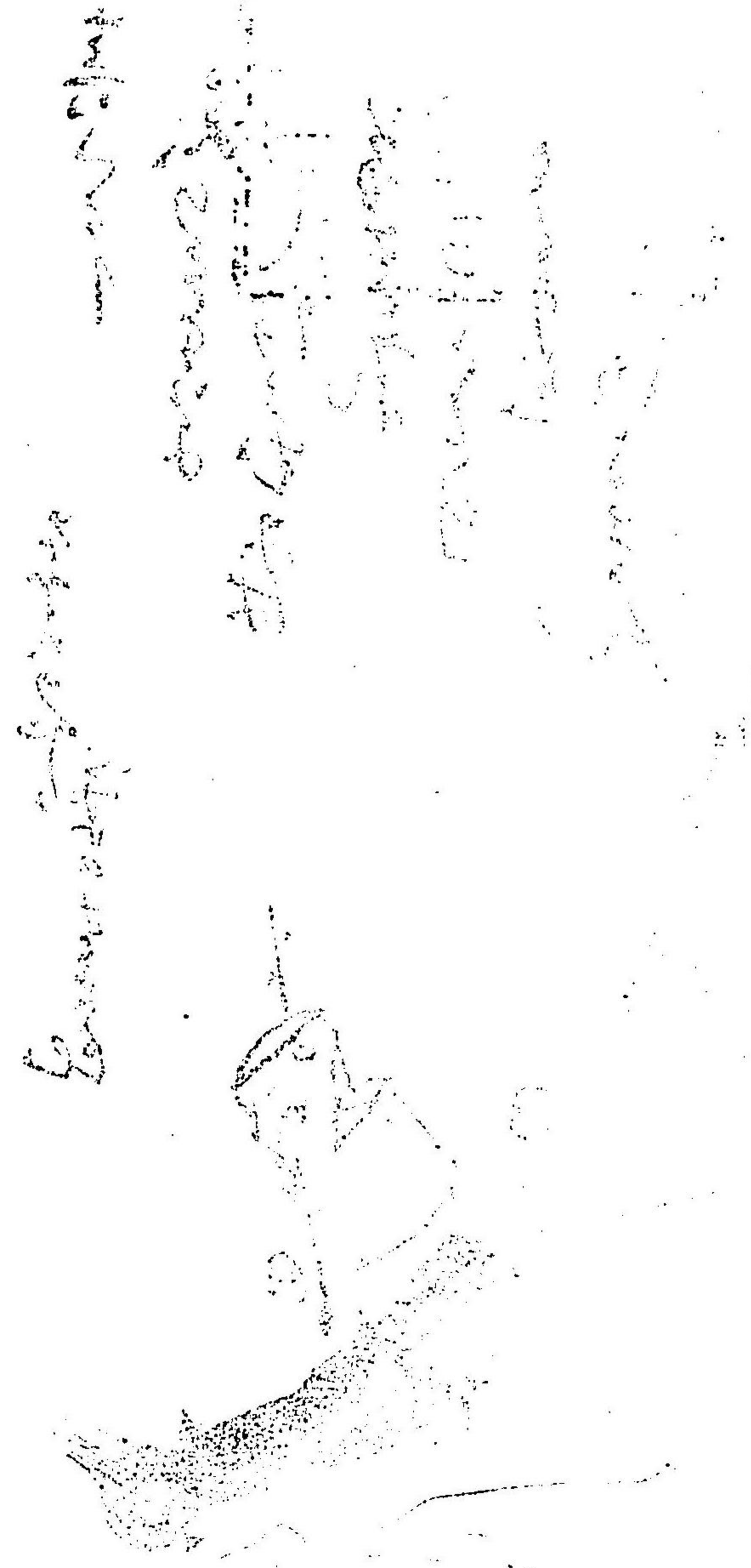
Handwritten Chinese characters, located on the left side of the page.

修學旅行九州日記

明治二十九年十一月第二小期の試験の後生徒と四つに分ち  
大宰府笹ヶ谷萩小野田へ修學旅行せしむること、定めつ。大  
宰府の職員は石井盈元橋義



九日。職員生徒一同學校の廣庭に集りかたみに暇申して、八時門を出  
る。その時、大宰府の職員は石井盈元橋義、大宰府の職員は石井盈元橋義  
とす。方へ向ふ。我一行は小野田行と連れ立ちて行く。まだはのど  
くらくと冷なれども、一同意勇みに足の運も早し湯田町を過ぎて旭さし出  
る。山の方の雲のたちまひいと覺束なしと見るはさに時雨ふ  
り。わひしくもあらぬ門出にむら時雨ぬらま袂を我は持たなくにとある人口  
きさめばげに皆戎服姿なればなど。たはふれつゝ行くに。時雨もふるに甲斐を  
しと思ひけむ。とみに霽れて空いと朗になりぬ。九時頃小郡に達して小野田



行と別る。かたみに心の内に。恙からんを祈りつめり。豫ては樾野川を下りて  
汽船に乗るべき心組ありしが。この川底淺くして。便あしと沼田小市といふ生徒  
のいへば。さらば相原へ立越ぬよとて。又こゝを出で、行く。この生徒は長府の生  
にて。并て大宰府へ物して。案内よくしりたりといへば。教導に定めつるなり。十時  
半つさぬ。制籠うちひらきて。しばしやまらひて。氣船をまつ。此中國の海を行き  
かふ船は。大方處々の港に立寄りて。乗客荷物の上下をす。やがて笛の音聞ゆ。さば  
とて。其にのりて。うつる。第二早柄丸といふ。十一時五十分鐘をわぐ。海は穩にして  
席をひきたらんが如し。四國九國まで遠く見渡されて。遠山の姿島根のたゞぞ  
まひ。睡るが如し。笑ふが如し。左の方を秋穂浦といふ。すぐる夏季休業中。れのれ  
海水をのみんとて。かかくここに止りければ。あるときは。蟹小船に釣を垂れ。あ  
るときは。沖の小島へ渡りて。荒磯をわさり。なとて。徒然をなぐさめけり。其島  
その海を。目の前に見ること。いて。いと。なつかしく思ひつ。元橋氏に。其折の事  
をも。かにかくと。語りひ聞ゆつ。行く。船は。まづ。丸尾次は。床波に立寄りき。床波

より西の方一帯の海邊を。緑の隈とかいふ。小松原うち續きて。景色よし。所々に  
烟突の高く聳ねて。煤烟を擧ぐるを見る。石炭採掘の爲なりとか。げに白砂の上  
に。黒炭のうちこぼされたる。けさやかに見ゆ。これに松原のいとう青さをそへ  
て。三色の旗ともかへつべしなと。戯れつ。本山岬を越ぬて。刈屋に立寄り。小野  
田の沖を行く。小野田は。縣下第一の工業場にて。セメント會社。硫酸製造會社な  
どあり。烟突の多く。煤烟の空をかすめたるにて。其規模の弘大なることも。その  
事業の活潑なることも。知られて。いとたのもし。明日は。我友とちのこゝにきて  
いかばかり見聞をひろめ。智識を増さんなと。思ひやるは。せに。いつしか。長府の  
沖にさしかゝれば。滿珠干珠のふた嶋。まろかかに居すわりて。我らが旅をねぎ  
らふに似たり。其處も。ほとく過ぎて。度浦早柄の瀬戸に入り。あるは。源九郎か  
偉功を稱へて。平氏の滅亡をかなしむ。あるは。外艦砲撃を忍び出で。聯合艦隊  
の來襲を憤り。左に火ノ山。右に老ノ山の砲臺を望みつ。かくてはいかなる外  
艦も。此瀬戸を。ぬや。は。通るべき。此砲臺より。滿珠干珠に。標的を設けて。實彈射的

の演習を行はせらるゝこと折ふあり。その度毎に、此嶋のほとりへは、な近づきそと沙汰せらる。さるを長府の蟹の此掟をきかぬが有りけり。いかなればかへり。とある人の詰りけるに、彼彈丸は標的にこそあたれ。そをいたく離れてはそれたることなし。されば危ににて。あやうからぞといひきとか。あな頼もし。彼外夷來攻の時。はしも。恥かしき事ぞ多かりける。彼には遠眼鏡のあるを知らせして。真田幸村が故智をまねびて。大木の中をくりて。大砲のごとくしつらひ。武備の調ひたるを。ホさんとたくみたるは。かへりて侮り笑はるゝ種となり。き。又長府にては。鍋釜なごのとき。日くになくてかなはぬものは。家毎に只一ツを止めて。其外の金もて造れる器は。盡くかきあつめて。一の大砲を鑄つ。多人數うちかへりて。潮く岸邊へもてゆきて。さるべき處にそゑて。敵の軍艦をうちたれども。命中はせざりけり。さるはごに戦やふれて。夷ども上陸しぬれば。齒をかみて口惜しく思ひけれども。しごかでかなはぬ事となりぬ。さて此大砲をいかにすべきといふに。かばかり重きを。夷どもなごて。お奪ひ去るべきとて。そが

まゝに打捨て、置きたりけるを。いかなるからくりにてか。事もなく釣あげて。海の上へ持て行くを。遠のきて山の上より。見居たりける人。肝を冷やしけり。とかや。かく口惜しく。愚なる事。のさはあるが中。に。さる一手の隊長なりける某。は。ピストルもて。軍艦をうちけるとか。誠に兒戯にも劣りたる。振舞なりけるを。今はかく武備も。戦術も。いみじう調ひ足らひたる。御國の進運こそ。めざましけれ。な。なご語りひ。誘はるはごに。馬關につきぬ。時は四時三十分なり。直に通船にて。門司へ渡る。このあはひはいと間近くて。呼ばへ答へむはごあり。硯海といふ。大船小船輻輳して。繁昌いはん方なし。おのれは御國のうち。は。大方足の至らぬ所。とてはなけれども。西國は今を初の事にしあれば。こゝもさしてことやうには。見ぬされども。何となくうら珍らしく思ひけり。四時五十分。汽車に乗りぬ。車窓を開きて。右を望めば。防長の山水は。我等に別を惜むに似たり。彦島巖流島。赤とも見ゆ。たちまち大里の驛につきぬ。此處は彼柳浦といふ所あり。されば大里は。やがて内裏なれども。

立寄りて見るもかひなし筑紫かた柳の御所の跡もあらねばとて外に出で赤坂といふ處をすぐ此處は慶應の役高杉晋作が小倉の兵をうち敗りし處なり五時五十分小倉につきて藤谷といふ家にとまる主をめして常所にて見るべきものはあらせやととふ赤瓦の外さるべきものは侍らすといらふ赤瓦とはといへは神道蓮門教會の本院ありといふさてはかの天理教會とかいふものともにも妖教なりとて世にかしましくいひ難さるゝものかそのさまいかならん見るもよけんと思ひつゝ食事あとしはてゝ明日の事ともいひ沙汰してあやしげなる衾のいとう薄さに戎服のまゝまろねしぬ

十日昨夜いたく寒かりければにや風の心地になりぬれどもまだきに起きて燈の下に朝飯くいて六時宿をいづ風いと寒けれどもかへりて心地爽かにおぼへて道を東にとりて界町といふに彼赤瓦を尋ねげにいかめしげなる家の赤瓦以てひたふきに葺かれたり正門はまだあかざりけり通門の細うあきたるより入りてしかくのよしを告げて案内を乞へりやがて一人の老婆出で

きてこなたへとて庭園に導きぬ園は街道を隔てゝ本院の向にあり周圍數百歩まだ新しければ見るべきほどのものにあらまざれば心を入れて作りたるなるべし晝のほゞは公園のごとくして人の遊覽に交かすといふこも人をなづけんのしたくみならんか南の方に大なる碑あり蓮門妙法塔と刻めり那知黒もて根を埋めたりめぐらすに方八寸長四尺許の石柱をもてせり其石柱毎に寄附者の姓名と金額とを記せり千圓二千圓正六位某從五位なにかしなとも見ゆまことにやあらん僞にやあらんどもかくにもかゝるものにかゝる奇特のありてか位記あるものゝ少からぬ寶を喜捨せるこそあやしけれこの者どもよかのがまな子の教育を頼むべき學校へはそもいかばかりの寄附をやなしたりけむあゝあゝと思ふに大方世の人かゝる迷におぼゝるゝのみにしもわらせおのが怨をとげんとはつゆ寶を惜まされども世の爲め人のためにはさはめてやぶさかなることうたてけれ今の世のさまをいかにと思ふぞ鱒爪を研き狼牙をならして青空にかけらん蜻蛉御國をつかみもし

くひもせんぞるけがそろしき國もあなるを。皇御國の民たらんものは。かけまくもかしてき大救語を心として。遠き慮をあさせば。いはゆる近き憂のあからんや。はあはれ邪説は正理にうち勝つかとこそ疑はるれ。賣僧巫蠱の狂言綺語は邪説なり。國家の爲義捐を説くがごときは正理なり。さるを。彼には争うて寶を出して喜捨といひ。此には。やぶさかにしていさゝかの財を出せにも。顔を繋めて義務といふ。義務は素より義務なれども。願ふはその心と詞の濁を去りて。喜務とこそいはせまほしく思はるれ。とおもほぬさうち笑まれてたゞぞみてありけるに。石文の方にかゝと音するを見れば。ある人那知黒を取らんとするにぞありける。さなせそと制して。さてそこを出で。今は正門のあきたるより入りて本院を見る。ぬさ注連にぎてあぞ。さるべきやうしなしたれども。尊しどもたもほぬぞ。やがてまかるよしをいはせて。舊城廓練兵場を見んとて出づ。城は今は見るかげもなし。城主小笠原氏赤坂にて高杉にうたれて。こゝにもさゝぬがたく。城に火して香春に走りぬ。いと弱き藩かなと一人がいへば。いさど

よ。此藩の弱さにはあらずかし。高杉が智勇のすくれたるあり。あはれゆかしき偉人かな。かゝる人のまたも我防長にいで來ることかといへば。そを出でこさす來させぬは。君らが鞭のふりやうにこそはあらめなぞいひあひつゝ練兵場へ至る。人夫多く土を運べり。こは此處に。第六師團第十四聯隊のおかれけるが。今は西部都督第二師團司令部の。かかるゝことゝなりて。この練兵場をもどりひろげんの爲なりとか。南の方に製糸場見ゆ。兵衛内をも此製糸場をも。見まくほしかりけれども。涼車の時に後るゝを恐れて。いそぎて停車場へ行く。七時五十五分發せ。たちまちにして北の方に帆柱の林立せるを見る。いつこととへば。若松港といふ。さては筑前運輸の要衝なりとか。かねて聞きしが。げにさるべき港と思はる。此度製鐵所をもこゝにねかるといふ。後の繁榮のはぞ思ひやらる。黒崎をへて折尾につく。こゝは興業鐵道と九州鐵道との行きちがふ處なれば。軌道いと多く縦横に亘れり。そを發して。遠賀川の鐵橋を渡りて左右を見れば。耕田幾頃なるふん。いと廣く見渡されて。我ふる里の地勢にもやや似たりけり。赤間



二〇  
福間古賀をへて香椎に下る。時は十時二分なり。直ちに宮に詣り、道の序のた  
りにまかせて裏門より入る。思ひしにはたがひて御社のさますべて事をきた  
れども、何となく神さびて尊し、宮司、余しも神に事へまつる折からなりはり。社  
前に額づきて、あちこち見あり、ほゞに關東にて生れたる身のかくはるゝ  
と、こゝに詣來て、尊き神にまみれまつることのうれしさよ。これも大神の導か  
せ玉ふにぞあらんせらん。亡き人は甲斐なし、老たる人々と、諸共あらましかば  
なぞ思ひやりて。  
筑紫なる香椎の宮に詣てきて、そのみの幸を思ふ今日かな。と獨りこちつ  
と社の前に行けば、綾杉いと神さびて立てり。傍に碑あり。  
千早振香椎の宮のあやまきは神のみとさになてるなりけり。  
といふ古歌を刻めり。青石にて字には箔をうちたり。昔は故有栖川一品親王のかぶ  
せ玉へるなり。裏には漢文にて、碑をたてたるゆゑよしをかけり。明治十年五月の建  
立なり。こゝに、廣島縣尋常師範學校生徒の歸路なるに逢ふ。宮司今は事をへた

るやうなれば、社務所へ行き、逢うて、  
功皇后八幡大神住吉大神の三柱にぞ。社格は宮幣大社にまします。仲哀天皇、熊  
襲をうたせ玉ひし砌、こゝを行在所とせさせ玉ひしが、事半にして、神あがりま  
しましき。御社の東方に古宮と云ふあり。これ玉体を斂めまつりし所なり。其御  
前に棺掛の椎といふあり。又彼の綾杉といふは、大神三韓征伐のとき、御鎧の袖  
に挿み玉べる杉を、御凱旋のとき、此處に兵器を埋めて、其上に植ゑさせ玉へる  
ありといふ。かゝる吉瑞のれはしませば、豊公朝鮮征伐の時、此葉を神にうけて  
兵ども甲冑につけさせ玉ひけるぞかし。其葉かれこれうちよりうちもつれ  
てあやおれるやうなれば、名づけまつりさよと云ふさはわれは心つかさりけり  
よく見て、こんどて行き、て見るに、げに世の常のとは、少しくさまかはりたるや  
うにも見ゆ。木の下近く小枝もあれど、にぬりの柵ゆひめぐらしたれば、けぢか  
く立寄りたければ、しかとは見ぬわかきふりたる杉は、みなかくあるものぞ  
なぞいふ人もありけり。又社務所にかへりて、御札御盃御寫真あをうけて、な

は舊蹟をたづねれば、兎塚鎧塚は、大神の甲冑をめし給ひし處なり。誠塚といふは、三韓の賊ども、耳をきりとりもて來て、埋められし處。不老水といふは、武内宿禰が飯をかじぎ酒をかみける泉にて、此水の靈瑞にて、此大臣、三百余年の長き齡を保てるありけりなごこまゝと語る。寶物見たきよしをいへば、宮司力あきさまにて、口惜しくも、當御宮は、しばし兵燹に罹り給ひつれば、見せまつるべきものは、奉らすといふ。さらば案内一人たび玉へ古宮ををろがみて、不老水をも、掬ばまほしうこそといへば、うべなひて、をとなを呼び出だしてつけれたり。即ち古宮へ詣づいと、小宮祠なり、棺掛椎も若木あり、ひこばねにてもありなん。此わたり木立うちしげりて、晝も小暗しはかしく、掃きも清めぬ小徑の落葉のみぞ積りたるいと、かあしくそぞろに涙催されぬ。此あなふふどかがまりて、木の實を拾ひとりて、これをこれ香椎の椎とはいふなりといふ。見れば栗團の實に似たもけり、飯食はるべきものにあらざるをといへば、焼きて物して見給へかし。いと、かんばんしきもにぞある。此わたりの童子は、こを拾ひと

らんとて、うちむれて常にくるものをといふ。此男、齡は四十あまりにて、うち見たる處、朴訥の田舎うどにて、うら言を構ふべきものとも見ぬざれば、人々朽葉かきやりつゝ、拾ひとりぬ。されどつゞく見るに、異るとなき栗團にあんわりける。かゝることよりこそ、世に笑ふべきことを、かしいとはいひならはしけめ。不老水へ行かんといふに、道のはど四五丁もありといふ。さては、汽車におくれなん。

事ここにまたいわけなき身に、しあれば、老せぬ水を汲ぬともよしとて、停車場へ立歸りぬ。十一時卅五分發車、四十二分箱崎へ下る。福岡縣尋常師範學校の職員なる間岩の巫ぬし、立ちとりて、いたく遅かりつるかな。我は今朝より待ちばひ侍りつるをといふ。いと、かたしけなしや。まづ御社に詣づ。これも神功皇后玉依姫、八幡太神をいつき奉れるにて、官幣中社におはします。もとは、穂波郡大分村にしづまりまし、が、いこの頃にか、此地にうつりましぬ。彼元寇の時、兵燹にかゝり玉ひぬ。大内義隆卿、今のみあらかを、建立し奉り、櫻門は、小早川隆景卿

が造營し奉りたるなり。その扁額は敵國降伏と仰がれ玉ふ。御手蹟は醍醐天皇にましますとか。樓門を出で、左のかたに印の松といふあり。これも若木なり。側の標札に。

此宮の松こそは應神天皇御誕生の御胞衣を宮に納めとめたまひししるしに植ゑ玉ひし神木あり故に一つには標の松ともいへり抑々此地はしめは葦津浦といひしをかの宮を埋め玉ひしより宮崎と定めしとぞ。此宮の濫觴となりたるものなり。

千早振神代にうゑしはこ崎の松はひさしきしるしなりけり。とかきたりけり。樓門は乾に向へり。此處より海の表までまぎれに見通されて、濱にも鳥居のたてるなど。うるはしくおどろかなる御社ありや。今は時ぞ生徒に中食せさせたしといへば。聞ぬし。さらばこなたへとて。此人のをぢなる渡邊檀といふかたに導き玉ひぬ。主はあらざりけり。うちかた。湯茶あを賜ひて。かひくしくもてあさる。其處にて間ぬし語らく。此宵の宿りはいか、せさせ玉ふ。此度の御旅行

は生徒も職員も。自費にてせさせ玉ふとき、つるからに。我學校にては人々うちかたらひて。さては費もいと玉はん。學校のうちへとめまゐらせては。いかになぞいふ議も侍りて。その設をもしおきて侍り。わびしくともしかせさせ玉はきや。それはた便あしとおぼしめさば。ざるべき。旅宿をも。かねてかたらひかき侍り。いづれにても。御心にまかせ玉へといふ。いとみこころさしの厚き事になんありける。されども。其方さまの類ともなりなん。と思ひつれば。旅宿の方に定め侍らんといらへて。さて其處を出で。又御社へ行きて。社務所につきて。扁額の緣由を尋ぬ。宮司の曰く。これにつきては。傳二ツあり。一ツには。延喜のみかどに大神の託宣ましまして。後の世に西海に事あるぞかし。その鎮としてかくせさせ玉へとのたまはせ玉へば。やがて此四文字を物せさせ玉ひて。此宮に納め奉れりといふ。今一ツは。帝寶算を祈らせ玉はんとて。御年の數に合せて。三十七枚を物し玉ひて。宮柱の礎の下に。おかせ玉へりし。ちりといふ。いづれか真ならん。思ひ定めがたし。今は板にゑり奉りて。御庫の中に秘めまつれり。其をひきのば

ねて。額にはかゝけ奉れるなりといふ。げにその板のすりものは。そこに望の  
 者にさげ玉へば。御札と共に戴きて。間ぬしにひかれて。帆柱石といふを視んと  
 て行く。香椎の方へかへるなりけり。箱崎の町を出で。小松原をへて。金出川の渡  
 舟に乗りて。汽車の鐵橋の下をすぎて。かゝれば。香椎より徒にて來りたらまし  
 かば。かへりて。便よかりけむを。をぞくも物しつるかなと思ひけり。此わたりを  
 多々良濱といふ。彼元のぬみしどもは。こゝらへもみだれ入りけむ。足利の兇賊  
 を。菊地武敏か逆へうちしはいづこなるらん。さては。小早川氏が。大友氏と戦ひける  
 は。なぞ語りあひつゝ。堤に沿うて下る。右手の田園は。隆景卿が。元寇防禦の石を  
 集めて。城さし處なりといふ。今は。鋤さかへされて。跡もと。めず。行きとまる處  
 を。名島といふ。神功皇后の。纜をとさ玉ひし處なり。こだかき丘の海につき出で  
 たるにて。上に。辨財天のはこらあり。まづ。額づきて。あちこちを。あるきて。見渡せ  
 ば。いづこまでも。小松原うちつづきて。そのひまゝには。福岡博多の。家居の。し  
 げう。立ならひたる。浦々の。蟹の。伏屋の。まばらかに。うちつづきたる。なぞ。繪にも

かゝまほしきな。かめなり。岡を海のかたに下りて。帆柱石を見る。磯うつ波に洗  
 はれたり。徑は二尺餘にて。長は二丈もあらんと。思はるゝか。八ッに折れた  
 り。實に帆柱の化石したるものに似たり。根の方に。鉄輪の跡とおぼしきも。見ゆ  
 土俗。神功皇后が。三韓を。きため玉ひて。歸り來玉ひけるを。りめし玉へる。御船の  
 櫓なりといふ。いとうけが。たき事になん。そこの。巖の上に。しばしやまらひて。向  
 を見渡せば。右の方より。長き松原の。洲の。帯の。ごとく。細う。うち。亘りて。海を。うち  
 とに。へだてたり。今日は。しも。天氣。朗にて。入江は。鏡をの。ひたらんが。ごとし。あ  
 まの。釣船も。いどの。ぞ。かなり。この。中洲を。海の中道といふと。あれば。

多々良濱や海の中道な。かゝにかゝるな。かめは。あらしと。思ふ。其處を  
 たちて。歸路に。就く。箱崎の。町に至りて。間の。うしいへ。らく。今。霧。我。學校長を。始め  
 職員の方々。いさゝか。あるじ。設して。待ち侍る。うけが。ひ玉ふや。いかに。といふ。い  
 なむは。あかゝ。になめ。げ。あれば。み心。さしに。従はんと。いへば。さらば。其よし。方  
 々へ。傳へ。まほしく。思ひ。侍れば。暇玉は。りて。車にて。往なん。とて。別れ玉ふ。重ねゝ

心こまかき人々の御もてはしめり。我等は勞をしのひて。徒より博多へ向ふ。東の公園と聞わたるに。元寇紀念碑の立たん處より。日蓮上人の銅像を建つべき所などを見る。相摸小太郎か偉功。上人の卓識をぞ。忍ぶにあまる懷舊なり。此處に。利休か釜掛の松といふがありとか。こは豊公薩摩攻の事をへて。しばらく箱崎に滞留しける時。此松原に茶齋を催しける。件の利休。雲龍といふ釜をかけて。松の落葉をたさて。茶をすゝめたりけるなりといふ。松の姿はとまれかくまれ。此由來はゆかしくもあらねは。見きて行く。博多の町をまぎて。中島の橋を渡りて。福岡に入りて。海容館といふに宿る。學校より。かねていひ沙汰せられたる事のおればにや。思ひしにこそ。懇なり。人の情はそれのみならず。職員一同よりとて。此方の生徒へ饅頭を贈られたり。又生徒一同の總代とて。四年生七名ばかり。菓子をもちて尋ねきたれば。かたじけなきよしをのべて。此方の生徒にひき合せて。かたみに心をさなく語らへよとて。我ば元橋氏と共に。案内にひかれて。職員の招きに行きぬ。生徒は問ひつ語りつ。いかに楽しく。いかに智識をも増したりけむ。いと

頼もしき事なりかし。我等は西の公園のさるべき所に導かれぬ。待ちうけ玉へる人々は。校長小泉又一ぬしより始めて。大久保高明。野村豊常。中島次郎。吉森谷辰三。黒岩勝橋。杉山外世四郎。石丸關次。吉井榮。廣澤定。間岩之亟の諸君にてなんわりける。かたみに。恙なくめぐり逢ひけるを喜び聞ぬ。あるは此度の旅行をねぎらひ玉ひ。あるは別れて後の疎ましかりきをわび玉ふに。我は親はらからに逢ひたらむ心ちぞしける。大久保ぬしは。東京師範學校に四年が間。共に物學ひせし友垣なり。黒岩森谷の二人の大人は。和歌山と青森にて。久しく同僚にて暮らしつる方々あり。杉山ぬしは。金澤にて親しく物いひかはせりし事もあり。かつらは。此君のこのかみとはへたてぬ中の同僚なりけり。野村石丸吉井廣澤間の方々も。過る頃。我山口へ修學旅行に物し玉ひて。諸共に酌みかはしたるちなみあり。小泉中島のふたかたも。學級こそ異りつれ。二とせば。かりがほど。諸共に東京師範校に。文學してありつるまじらひなり。さればうれしともうれしく。なつかしきともなつかしきに。けさより心地例ならざること。勞れぬること。もら

ち忘れてつがるゝまにく。打飲みうちのみにばてくはいたく酔ひて。物もおぼろせなりぬ。

古の聖はしらすのみくつてつゐに誰かばみたれさるへきまいて我は凡夫のあかのぼんぶありよしやなめなることありけむとも。

飲めはるひ酔へはみたるは人のさか我にはゆるせ酒の上の罪一の僻はといふさへあるを。あせいへど。心づから免すにはあらず。

酔ひしれてなし、事たに忘るまでのみと飲みける身をいかにせんといとつゝましうこそ。

十一日。まづ尋常師範學校へ行く。職員出で迎へ玉ふ。此程のしんせちを喜び聞ゆ。よべの事をうちわひなせして。黒岩ぬしに導かれて。室内をくまなく見る。職員も生徒もいとまめやかにいそしみ玉ふと思はる。物といふ物よく其所を得て亂れせくすれせ。いとよく調ひたり。見終りて。我は元橋氏と共に。校長室に入りて。くさぐさの物語をす。そのひまに生徒らは。附屬校の授業を見る。おのれ校

長にむかひて。我生徒の順良なるよしをいひつるに。我生徒もしかぞかしどのたまひき。此一言いと誇かに聞ゆつれど。かねて聞きたると今見たるをもて推するに。げにさるべからんといとめでたし。そこにて。茶を得て中食して。暇を乞ひて。又黒岩ぬしにひかれて。西公園へ行く。こゝも。三方海につゝまれたる小高き丘にて。その見はらしのよさは。名島にも増したりけり。今日もみ空のどかにして。小春ともいひつべければ。薄がきみきたる。遠山近山。さゝ波よする長汀曲浦。見下す市の賑はしき。見はらす海のゆほひかある。かゝるながめは。又思ひつゝ。こゝにたゞきみかして。にやせらひて。黒岩ぬしの語るを聞く。抑々福岡城を舞鶴城とし名づけつるは。左に見ゆる千代の松原と。右に見ゆる生の松原を。二つの翼として。こゝの公園を首城の後ある岡を尾と見做せば。恰も鶴のみそらにかけたらんがごとく。きればぞかし。その生ノ松原といふは。神功皇后が倒にさし玉ひし松が枝のたひひるごとしものとして。いさとは名づけつるなり。南の方か。しこに見ゆるは。背振山。こはこれ僧の榮西が始めて茶の實を植

系し處。そのこがたなるは天拜山あなにかしこき菅神の雨を祈り玉へりし所  
 ぞよ。遠くかすめる高峯は方滿山。屏風ヶ嶽も見ゆるぞかし。西の方あれなるは尊  
 氏が居城のありし昆砂門山。そのや、弓手に。筑紫富士と呼ばるなる可也山を  
 見玉ひね。近くそれに見ゆるは七隈ヶ原。菊池寂阿が故郷に今霞ばかりといひ  
 やりしあはれは石碑に残りたり。九州探題のありし處は。生ノ松原と。七隈ヶ原  
 との間なる烏飼村はそれなりけり。さて又海の方にては。海の中道のはなにあ  
 たれる。大く見ゆるを志賀島といふ。そこには神功皇后の祭り玉へりし綿津見  
 神おはしまま。島人。此神をいたく恐れて。神は穢を忌みたまふとて。産婦は山に  
 かくれ住むとぞ。遠く見ゆるは玄界島。此島あるが故を以て。外の海を玄界灘と  
 はいふなりけり。その西北なるは小呂島あり。彼弘安の國難に。十万虎狼の元冠  
 を。皇祖神の神風にいふきはらひ玉へりしは。そのわたりにこそはありけれ。近  
 くそれなるを。殘島と名づけたるは。僅に三人の元の夷が。ふき殘されし處あり  
 奇ぞまめなる人の。こまくと語り玉ふに。皆人。心もあやに聞きた。めり。

神々の稜威かゝやく國そとは外國をひきしらて寄せけむ。誠に。小呂島の  
 愚かりける奴らかき。其折はしも。

神風に國をたくへて敷島の日本男兒はとく進みけむ。さきを争ひて。一旦  
 緩急あらば。

後の世もかくこそあらめ皇國は神も尊し人も勇まし。西の國の夷どもも、  
 よく聞きおさね。なせひとりごちつと。市に下りて。貝原益軒ぬしの墓はと問へ  
 ば。道の程近からせ。詣で玉ひなましかば。行手の便あしからましといふ。豫てかし  
 まだちのをりは。菊池入道の墓と。此博士のとは。は漏らさじと思ひおきけるを。  
 旅路にあらん日數にも限あり。かつは旅費の事をも思へば。今は力なし。たのれ  
 獨の旅ならましかは。と思ふもかひなし。修猷館長隈本有尙ぬしは。知る人なれ  
 は立よれり。そのひまに人々は。舊城内に。旅順にて戦死せる兵ども。の記念碑を  
 見たり。借市中を見もて行くに。繁昌いはん方なし。此頃は特別交易港と定めら  
 れたるにて。景氣ひときは引立ちぬといふ。博多福岡とはいへ。只那珂川をへだ

てたるのみなれば。今は合して福岡市とて。類多からぬ都會なり。されども此川一すぢにて。彼方とこなたと。萬につきて。いたく風俗はかはれりといふ。されば此川を風分川ともいひてまし。など語りあひつゝ。博多の祇園町に榊田神社に詣づ。天平寶字の元とし。河内國なる榊田の神を。勸請し奉りしにて。大若子命天照太神。素盞鳴尊の三柱しづまりまき。黒岩大人かたらく。彼武時か征矢を放ちしと傳ふは。いつはりあり。眞は武運を祈らんとて。矢にそへて歌を奉りたりけるを。といふげに。さもありぬべき事ありかし。繪馬堂には。陰曆六月十五日に。物したるこゝの祇園祭の。としくゝの山笠のかた書きたるをか。げたり。趣向も畫樣も。世と共にうつろひ行くさま。あきらかに見らる。此山笠は。祭毎に十二本づゝ製りたてたりしを。大内義隆その半をわけて。我山口の祇園祭に用ひしより。今は六本とあれりどぞ。さればにや。我が方の祭と目も同じくて。山笠の趣向も。いとよく似たる處も見ゆ。なほ境内を見ありく。御社の后にも。つなき石といふあり。唐船のとも綱をつなきしものありとか。さて停車場に行きて。發車

を待つほそに。松本四郎といふに逢ひぬ。此者は。我甥子の家祖父の世より。とかく波風たちさわげるに。父は三ッの時身まかりて。おのが家ながら。住みわびて。此子十七<sup>ケ</sup>年が間。我家にて。人となりぬ。我父いたくうれひ玉ひて。いかで。其禍の根をば。断ち玉はんと。年頃思ひはかり玉ひつるが。志をねとげ玉はで。なからにし。て身まかり玉ひき。おのれおほけなくも。其御志をつぎて。明治二十三年といふ年に。青森の中學校に。勤めたる身を。しどきて。此子の父方のを。ちにて。名のみは。後見人といふ邪人を。うちさためて。漸くまがつびを。はらひ畢んぬ。其折起りし。訟の庭の代言なりき。されど。心しらびの。いかにぞや。と思ふとの。ありける人にし。あれば。親しうは。物いはざりき。三時三十分乗りて。出づ。雜餉隈の停車場を。過ぎて。軌道は。水城の堤を。穿ちて。通れり。そこに至りて。黒岩ぬし。さは。此處ぞとて。指し玉ふ。立ちて。見るに。げに。昔の堤とおぼしき。が長く。亘れり。四時二日市につきぬ。ここより。徒にて。大宰府に向ふ。途に。般若寺の舊跡と。高橋紹雲が首塚と。を見る。黒岩のうし。紹雲が義烈の物語を。ま。そのたて。籠りたりける。岩屋城は。かしこの



四王守山の中腹にありき。今も紹雲が城を焼きて自殺しけるときの糧米のふまぼりてやけのこりたるを堀り出だまよと云ふ。紹雲は立花宗茂が父にて天正の頃島津氏の爲にうたれたるものなり。又覆寺の跡をも指し玉ひて菅公がいまそかりし御館はそこにおはしましき。恩賜の御衣を撫で玉ひしも不出門行のからうたをうたひ玉ひしもそこにての御事ぞ。さればにや。今は八月の大御祭に大神の遷幸まします御所なりといふ。此宮の御祭に鶯換といふがありと聞く。そはその大祭のときかといへばいなとよ。陰曆一月七日の夜にて侍り。その事はせむるる三日ばかり前より最寄もよりのあき人。鶯の白にとまりたるかたどて木にて製りたるいとをかしきをひさぐ。そを人々贖ひて袖のうちにかくして詣でて。うそかへようそかへよと叫ばひつつありく。千萬の人のよばふ聲は。こたまにひびきていとかしまし。かくてかたみにこはと思ひたらんときかふるなり。大なるを得たるを縁起よしとて喜ぶ。この換ふるときまづ向の手をなで試みて。小からんと思へば。ふりはなちて逃げ行くを。この相手怒り

て。おひもて行くぞ。いとうをかしく賑ははしき事あり。さるはせに神職のうちにて旅人にやつしてまぎれ入りて黄金にて作りたるささやかなる鬘どかふ此を得たらん者は。こよなき吉祥ありとて。あくる日は。知りうどをつとへて。いと祝酒をくむどかや。此の黄金のは。宮より三ッを放つが例なり。近き頃よりは。九州鐵道會社より十ばかりをよすといふ。さて事をへてあくるあしたは。これに集ひたる人々の立歸ることとて。鐵道會社にては。定まれる發車にては。事足りる臨時の瀛車をおひつぎて出まふかし。それにては。此祭のいかに賑はしきを。知り玉へなどのたまいつゝ。行きくゝて四時五十分。大宰府の町に入る。家居は。御宮に詣づる道の雨がばに並ひ立てり。鳥居三つばかりくゞりて境内に入る。いと物ふりたる様の。五抱むかへもあらんか。とおぼしきが。茂りわへり御池には。水鳥靜に遊へり。弓張形のみ橋二を渡りて。養める道の。いとう直なるを行く。雨脚にとうる多く列れり。その後には茶店軒を並へたり。襷門を見あけ奉れば。菅聖廟どかへ。やき玉ふ。爰にして大人又のたまふ。此大神。人にておはしまししと

き。廟宇は、廣に从ひ朝に従ひ玉へは、朝廷をいみじう尊び玉ひける御身の、をのづから憚り玉ひて、廟宇にのみぞ物し玉ひける。さればこゝにも、かくはかゝせつるなりといふ。乾隆三十五年桂月湖北巡撫部院梁口書とあり。又其下なる御額は、斯德惟馨武英殿大學士潘世恩盥沐拜書と見ゆ。其を入りて、本殿を見たりて、紫宸殿のかたをうつされたるにて、大方の宮の様には、見ゆ給はせ。御洗水につきて、手あらひ口そゝぎて、大前に額づきぬ。黒岩の大人は、手口はいふも更なり。頭をも面をも、幾度とあくいくたびとなく、洗ひ清め玉ひて、廣前にかゝまりて、掌うち合して、眼をとぢて、いと久に祈り玉ふ。生徒の中には、あやしと見たる人もあり。抑此君は、早くより此御神を尊び玉ふこと、世のつねに越ゆ玉ふ。故郷ある和歌山に、たはしける時、朝ごとに其處の天神の宮に詣で玉ふこと。雨の口風の日も、かき玉はさりけり。又親に事へて、一方ならざる事の公に聞わて、物賜はりけり。と昔まで、に我は聞つる。其の後福岡へまけて、こゝに十とせ餘になり玉ふ。此の年ころ、日曜とどには、るく此處に詣で玉ふこと。一日も落

ちせとは、よべのうたげの席にて聞きぬ。されば此處の宮司より、大宰府の町人はいふも更なり。をちこちしるしらぬ。其の奇特を、賞めたたへざるはなしとかや。めてたさ人の御行ありかし、をろかみはてゝ、そこに立てる飛梅を見る。龍骨いとりゝし。又碑は

凡神國一世無窮之玄妙者不可敢而窺知雖學漢土三代周孔之學經革命之國風深可加思慮也

凡國學所要、雖欲論涉古今究天人其自非和魂漢才不能闕其闕與矣

有欲建碑大宰府

天滿宮者應其需書之

安政五歲次戊午初秋

前權中納言菅原爲定□□

右二則我神之所遺誠也後有志者

其鑑焉哉

安樂寺正別當權大僧都法印信全

とよまれたり。抑神殿は神喜五年八月安樂寺にて造營創始の式をわけて九年の後工を竣へさせ玉ひき。その後代々の天皇勅願あらせられ。中門廻廊をはしめ。堂塔多く造り増し玉ひて。年月に榮えさせ玉へりしを。彼岩屋城の火の禍に罹りたまひき。今の神殿は。小早川隆景卿建立しまいらせ。樓門は。豊臣秀吉公。石田三成に奉行を仰せて。造營せさせ玉ひしが。階下のみに止まりしを。黒田家工をつぎて。全くしわけまいらせしのみならず。廻廊をも造らせ玉ひしとかや。すべて此御社のさまを。から様の詞を以て申したまへば。輪たり輿たり。壯嚴清雅なまともいひつべしを。ちこちよりのささげ物。石にも金にも。さざみたる彫りたる。をかしきもゆかしきも。めざらしきもめでたきもあり。繪馬堂に入りて見るに。これにもくさくの額。掲げられたり。神殿の後には。この頃。此わたりの里人相かたらひて。はるけき處の泉をひきて。瀧を落せり。その奥には梅園あり。そこには。丹頂の雌雄かはれたり。本殿の右の側なる。御札なま下け玉ふ處へ行き

て。み札米供などをうくるひまに。黒岩主して。ほうもち拜見のとを乞はせ玉へば。今日ははや。入相近きことにしあれば。明日にせさせ給へといふ。さればとて御社を出て。鳥居のもとなる。泉屋といふにやどる。元橋氏後れて来る。いかにせさせ玉ひしと問へば。御神像をいたゞきて。時を移しぬとて見せ玉ふ。一かたは黒染のみづしにおはす。一かたは飛梅の核の中におはま。束帯の御姿。いと尊くさざまれ玉へり。あなおぞましかりき。我も明日は戴きてんといひあへり。此奇特人の導き玉へることにしわれば。宿の者いとねもどろなり。人々皆よろこぶ。湯あみなどして夕げにつき。黒岩ぬしといさゝかくみかはしつゝ。ふるきことどもうち語りて。臥床に入りぬ。から親しき友と。旅のやどりに枕をならべて。うちふしぬることの。うれしといはんはおろかあり。こよひはいかなるゆめをや結ぶらん。

十二日。まだ明けぬに起く。黒岩のうし見ぬ玉は。まじばしありて。出て來玉へり。いかにと問へば。はや宮へ詣できつといふ。七時まき宿を出でて。白川橋といふ

を渡りて。觀世音寺にいたる。山門の額に觀世音寺とあるは。道風が筆の蹟なり。上に名高き鐘はかかれり。御寺は天智天皇。まだ儲君にましくけるとき。母御門のおん爲に。建立せさせ玉ひきとかい。と丈高き御佛。三体立たせ玉ふ。中なるは天智天皇。左は天武天皇。右は聖武天皇のゑらせ玉へるみすがたにて。美術上にもいと稀有の御作なりとぞ。この外にも。三たり四たりたはし。す。左の隅に水城の樋二あり。いづれも一の木を四に裂りけむ。一ひらなりと。思はるゝに。口の徑は二尺五六寸もあらむ。いとめざましき大木ありや。木質は何とも見分かねど。杉なんゆりとおぼゆ。長は一丈四五尺許なり。さて昔は。宿坊も數多ありける。大伽藍ありしに。今は只戒壇院のみ残り。此院は唐の監眞和尚が。授戒を始めし處とて。下野の藥師寺と山城の叡山のと。日本三戒壇院と稱へらる。御寺の北方十間許に。玄昉の墓ありといへど。行きても見。昔の官廳の跡を見んとて行く。大門のあととおぼしきあり。それより少し入りて。都府樓址とかきたる碑あり。その傍に。新らしき大なる碑の。いとうながき漢文かきたるがあり。明治十八

年八月の建立なり。文ば。そのかみの縣令渡邊清が作れるなり。生徒はうつし取れり。此處に昔の礎いと多し。石質は花崗石とたぼし。孰れも方六尺許にて。柱の座は少し盛り上りて圓し。徑は二尺餘なり。いと黒うさびて。ふりにふりたる年月を示す。なかに一磨かれたるあり。こはそもといへば。さる嗚呼もの。をさび業なりけり。捨てかさたらましかば。皆かくはなしたらましを。早う人の見出でて。おし止めけるこそ幸なれといふ。何事につけても。心なき人のふるまひこそせびなけれ。此あたり東西拾四間。南北六間がほどに。三十ばかりの礎あり。又其北にて少し低き處にも。いとたぼし。埋れたるはかぞふべからせと云ふ。古き瓦のなほ残れるが。あり。とさきつるに。といへば。さにて侍り。この礎の如く見ゆるは。その殘欠になん侍る。とて拾ひて見まるに。げに布のおりめのかたも見ゆ。石にては。あらざりけり。さはとて人々たちわがれて。都府樓僅かに瓦色を見る。觀音寺只鐘聲を聴か。なご戯れつつ尋ぬ。得るまゝに持てきて。大人に見。大人は。其處の礎のほとりに。蹲り居玉ひて。あるは。うちかへし。打返して。句を見。あ

るは石に打ちあてうちあはせなせして硬を覺りうのふるき新しき見定め玉  
 ひてこれよし。かれはをかしからまををもて行き玉ひぬ。こはうち捨て玉へよ  
 など。懇にさどさる。かゝる事には心きゝたる人々のきほひで尋ぬる事にしあ  
 れば。おひつぎてもて來ること夥し。黒岩ぬしも。かくばかりありけりとは。おも  
 ほむさりき。と驚き玉ひぬ。されと口惜しくも。いとよきは見ぬさりけり。いと古  
 く外國より渡りたるは。紫に匂ひて極めて硬し。されば風雅士は。視などにした  
 てて。愛てほぞばしるといふ。その色にとりて。から學の輩は。紫瓦樓ともいふと  
 かや。今は時もうつりぬ。さのみはとて其處をたつ。天拜山は西に見ゆ。又ここよ  
 り北の方に。刈萱關の址あり。加藤左工門繁氏か居りし處なりと傳ふ。國分寺の  
 址もわりといへど。みち行かま。かへり路につきて宮に向ふ。道にして黒岩大人。  
 爪先に蹴かへしたるをとりあげ玉ひ。その小溝に洗ひ玉ひて。こはいと珍か  
 なる瓦片にてあり。これを紫瓦に侍りて。これせたり。しばしありて。元橋氏も  
 ささやかなるを拾ひて見す。此は今のよりはよし。今少し大きからんにば。あは

れいみまき尤物なるべきをといふ。いと喜びてもて行く。人々の目は。なほ道の  
 上はのみぞある。宮に参りて。又廣前に拜す。生徒らのいやしく。昨日には似  
 ざりけり。こは。かのれ道すがら。大人がひとゝなりより。此大神に事へまつるこ  
 との。いみまきよしを語り聞かせつれば。その徳化にやよりたりけむ。いとう  
 れし。どかくするほそに。宮司西高辻信嚴ぬし出で來て。神前にほうもちどり並  
 べ玉ひ。一々につき。由來を聞かせ玉ふ。まづ大神の物し玉ひける詩の御幅。離家三  
 四月落涙百千行往事。渾如夢時々仰彼蒼。と讀まれ玉ふ。次はみばかし。身は三尺は  
 かり天國の作なり。重盛公寄附の御大刀。行平の作。山中山城守寄附信國の御大  
 刀。外に秦包平小鍛治宗近正宗村正の作もあり。いづれもあはれわざもの。焼及  
 のにはひいとゆかし。大神の物したまひける法華經八卷。唐の弘文館にわりしを  
 吉備の大臣の持て歸りし三聖像など。誠に得がたき寶なり。拜覽了りて。神前に  
 居あがれて。神酒をさへ。戴さぬ。宮司に短冊と筆硯を乞ひうけて。三首の歌を  
 ぞ奉りし。

筑紫路につくれる宮のみや柱太くたふとき神にます哉

廣前にしけりに茂る樟のくすしき神や御代守るらん

千早振みたまちはひて教子の行くさき長くもり玉へとそ

さて我も人も御神像をうけて後園の方へ行きあるひは瀬つ瀬にのぞみて心の底をまじしあるひは丹頂に飼をかひて。僕にやさしきをたへなとして。神殿の後社務所の前なるささやかなる所にて。御盃御寫真などをわがきひて。樓門前なる茶店に入りて。名物の梅が枝餅といふを食ふ。味いとし。黒岩大人又見ぬすなりぬ。いかにしつらんと思ふほどにかへりきまして。そこを元橋氏との爲に。宮司にこひて。飛梅の神木二枝を求めぬ。とてたび玉ふ。そも此神木は。もとは誰にても。望まむ者に下し玉ひしが。あはざりにもてなま者もありて。いとかしこければ。今はつやく。他には出さず。寶庫に秘めれかせ玉ふといふあるを。此君に導かれれば。いかで此恵にわづかるべしや。いとかたじけなし。割籠うちひらさて。相輪塔を見る。此塔は御國にては。日光と叡山と此處と。僅に三基のみな

り。我は往にし十八年に。叡山のは見たりけり。さてそこを立ちて二日市に向はんと。とき鳥居の傍に宮司の御館あり。ひき入れたる處のいとゆかしき住居なり。慶應の頃。三條公四たりの公卿と。我山口より移り玉ひて。しばし世を憤りておはしける處あり。此處より南に。染川もありといへど。色になるてふものをとて。渡らで行く。此度は道ひきたがへて。檀寺のかたを行くと。見れば紫瓦あり。元橋氏のものにつゆ達は。只それは。いと小くて。よくすれて滑なり。これは。やゝ大きくて。うち裂れたる處新しう見えて角々し。つらく見れば。かみなでの石にてぞありける。あな笑止や。こを見玉へと。其人の目さきにさしつければ。思はざりきとて。諸共に笑ひとよむ。生徒らも笑ふ。黒岩主もきて。あやまらぬ誤ぬ。かくては。そこにとらせたるも疑はしといふ。元橋うじ。いとう口惜くや思ひけむ。疑しとは。愚なりな。そは瓶のわれたるかたなるをといふ。瓶にまれ石にまれ。さるへきあかしを見せ玉へといへど。おのれも今は。ゆかしと思ふ。心たゆみたり。さばれかゝるゆゑよし。のつきたらんものを。むげにまつべきにあらざれば。もて行く

元橋氏も、おぼせけ玄魂にて。かにかくとあらがひつゝ、うちも捨てず。心の内は我と同玄か、めり御寺の跡にも古き瓦あり。御旅所を拜して。やがて二日市につき。一時十分汽車に乗りぬ。今日は萩へ行きたる者は。大田を経て歸路にあらん。石見に行きたるは。嘉年より山路を越えて萩に出づべし。恙かからんや。こぞしき山路に、脚を傷ひたらん者はなきか。山路は雨の多きあらしなれば。ふられもせしつらんなど。うち忍ばれぬ。おどろくしき中に、黒岩ぬし手帳にもものかきで。さいてをこせたり。

真金路をいそぐ車を恨みつゝ、盡きぬ名残を惜む今日かな。どわりいと切なり。むねせまりて物もおぼえす。

真金路の車をさのみ恨みそよこひしき時は又乗りてこむ。どかへすほどに。博多の停車場につきぬ。懇に物いひあひて。君は別れて下りぬ。諸共に下らまほしく思ひけり。汽車は情もしらでたちまち出づ。

恨むなど人にはいへど別れては又もくるまの遠しと思へば。したあきの

みせられて。おやめもわかす。

時のまに千里をへだつ小車のめぐり逢ふ口はいつにかあるらし。と思ひつづくるうちに。ふと返しに恨みそよこひしきは何事ぞ。恨むなよとこそあるべけれ。と思ひのきければ。やがて端書に。おやされるよしを認めて。

悲しさにいふ言の葉もみだれたる心のほどを君しれどかくと書き添へて。古賀の停車場にて。車窓よりそこはたてる巡査に。たのみてかくりけり。四時十七分門司につきぬ。博多と門司との間は。小松原のみうちつづきて。さしもに速き車も入りては。とみに出でず。出でつと思へば。又入る。松につぎては。櫛の木多し。今は真冬の頃にしあれば。いどうもみぢて。緑の林にけざやかに匂ひ出でたるは。見るゆもいと楽しけれ。とも小枝にこの實をとるに。賤の女さへも見ゆて。いとつきなし。蠟は筑前の名物なりといふ。さもあるへし。車を下りて。公園に行きて。清瀧といふを見る。名には少し背けり。道にして人々。さたなげなる瓦を見て。おはれ紫瓦をさんなれど。拾ひあげて。かにかくと語りつづ。黒岩主をま

ねび出で、うち笑ふこと度となり。げに旅はをかしきものにこそ。はかききこども、こよなき慰の例ともあり。後のかたり草にもなるぞかし。公園を出で、市中を少しく見て。赤間關へ渡りて。又泉屋といふに宿りぬ。さて。明日は長府へ立越ぬ。明後日は。其處より船にて歸らましと思へど。船は長府へ寄りぬといふ。いと便あし。いかで寄らまゐることにもしてしがな。とて。汽船會社の事とり行ふ。江本某といふを尋ぬ。諸所に電燈輝けり。聞けば。今宵しもつけ初めたるなりといふ。漸く尋ねあてたるに。主はあらぬ。妻なる人に聞ぬ。おきてかへりぬ。夜に入りて。又生徒をやりて。語らはせられぬ。もかたげなり。高等小學校教員都野知若藤本竹千代の兩人尋ね來りぬ。藤本氏は我教子なり。此人にも。彼船のことばからひてよ。と頼み聞て歸しぬ。宿は小倉に似てむづかし。湯もなければ入らぬ。衣も着かへでうちふしぬ。

十三日。七時すぎ宿を出で、まづ電燈會社に行き。發電の機械を見。商業學校へ行き。一わたり授業を見て。高等小學校へ赴き。校長吉田毅登氏に導かれて授業

を見る。隣には文關小學校といふあり。生徒等はそこの授業をも見たり。高等小學校の職員一同よりとて。饅頭を賜はる。こゝに彼江本の翁とひ來て。仰せらるゝこと。の切に侍れば。船を長府の外浦へ寄せさせ侍るべしといふ。いと嬉し。さて此處を辭して。彼清國の請和使が。旅館たりし引接寺をのぞき。嗚呼ものゝ小山が。彼李爺をねらひ撃てる處をまぎて。兩國大使の會見場たりし春帆樓を見て。そのかみのことより。三國同盟など。そこはかどなく思ひ出てつ。心誇りもせられ。嘆きもせられ。いさどほろしくもありけり。安徳天皇の御陵を拜して。其隣なる赤間宮へ詣づ。神御靈は此幼帝にまします。御陵の上なる岡の麓。木の下かげの小暗き所に。平家の方々の墓石あり。長僅に二尺餘の。かのづからなれるまゝなるに。只名をのみ刻みたるが。皆同ト様にて。東に向ひて二列に並びたり。なかば土に埋れたるも。倒れかゝりたるも。あり。苔をかきてかまかに見れば。左の方より。後側は二位尼平忠季。平清繼。平景俊。平景經。平忠光。平家長。前列は。平教盛。平知盛。平經盛。平教經。平資盛。平清經。平有盛の十四人にて。なんある。いかなる。恩



願の者の源氏に憚りつゝ、かくは物したりけむと、おはれに袖をぞぬらしける。さて市を出で、御裳襟川といふを渡りて、又幼帝の御連の拙かりしを悲む。御裳襟川は伊勢にこそあれ、さる好事の者の水の底にもと言ふ歌よりぞ。此小川には名づけつるなるべし。しばし行き、彼外夷來襲の防禦として築きたりける砲臺の跡を見る。此わたりにこそ、彼の木の筒はならべたらめ、かやつらが上りけんは、いづこなりけむ。我がたさむの退きたるはいかある方にやあらん。おき思ひつゝ、行き、壇の浦の燈臺を見て、いとう景色よき海邊をたどりて、長府へ入りて、矢野赤にがしといふを宿と定め、中食ををへて、學校を見る。教員毛利元正氏も我教子あり。見終へて、此人の案内にて功山寺といふへ行く。門は竹田萬乗が作なりといふ。いとふるびにたり。海右第一峰といふ扁額をかゝげたり。此額は征韓の役、毛利秀元卿が朝鮮よりもてきしものなりといふ。觀音堂を見れば、これもいとうふりにたり。後醍醐天皇の嘉暦二年の創立にて、今年五百六十二年の星霜を経たるものなり。御寺を出で、門前にて見れば、巽の方に土

肥山といふ見ゆ。實平が陣營をかまへたる處なり。又南に唐櫃山といふあり。これは義經が本陣にて、壇の浦の戦はてし後、唐櫃に物を納めて、埋めたる處なりと傳ふ。其より忌宮に詣づ。此宮にも神皇后宮、仲哀天皇、應神天皇しづまります。そこにて毛利氏に別れて、濱に出づ。波穩かにして、日なほ高し。向に千珠満珠の兩島、我等を迎へ、がほに立てり。

言さやく國をきためし神わざをいひつくかねの島か根かこれ

これその妙に奇しき神寶みちひの珠を名におへる島なむひとどちつゝ、いでやと思ひて、又思ふに、我は青森にありけると、とき生徒をつれて、湯澤の磯山を見たりけるを、生徒ひとり、巖穴に落ちて死にきそを思へば、こゝはわたりでかなはぬことにし、もわらばやみなん止みなんと思へとも、おほ心のみ動きて、いかにや人と、彼島へ渡らんはといへば、みなさるべしといふ。さらば船を雇ひ、ことゝ沼田生をやりて、蜚を語らひて、二艘の傳馬に別れて、乗りぬ。かれどこれと、軍歌かけわひに歌ひつゝ、こき行くさまいと、楽しげあり。岸に登り

て、嶋の真中の道なきみちを通りて、左へ廻りて、磯傳ひして、元の處へ立歸りて、又のりて、泛ぶ人と歌うたふこと前のことし、その歌にやさ、はれけむ、隣の舟に懸おしつゝ、ありけるか、こ、過ちて足をまべらしてうちまろびぬ、これを見居たりける人、あゝとさけびぬ、幸にして海に入らざりければ、皆掌うちて笑ふ、かのれはそがひになりて、をちこちのけしきに、心ひかれつゝ、ありければ、このけうとき聲に、青森のこと、猶胸にうかびつゝ、ありければ、や、いたく肝をひやしぬ、今は暮近くなりければ、豊前の部岬なる、隠顯燈臺の光も出でて、消ぬづもぬつするさまいと珍らしき見物なり、岸につきて、直に宿へ歸れば、學校の職員一同より、煎餅を贈られたり、又沼田生が父君よりも、一同へ酒を贈られたれども、いさゝか思ふよしありければ、其志の厚さを、懇に喜び聞えて、そのまゝかへしぬ、此夜毛利元正氏も訪ひ來りぬ、

十四日、七時宿を出で、常樂寺の境内なる、仲哀天皇の殯宮の跡を拜ま、小高き御處の木立しげりて、小暗きは、香椎の古宮に似玉へるのみなり、老人々、朽葉か

きやりて、木の實を拾ひとる、十日のさまにつゆ違はき、唯眞の椎あるぞことなりたる、おはれくすしき因縁なり、そこを立ちて、外浦へ行く、毛利元正氏見送らたどて來りぬ、今日も天氣朗にして、つゆばかりの雲もなし、海につき出でたる巖の上に居て、双眼鏡に目を慰めて、漁船をまつ、やがて來りぬれば、毛利氏に別れて、舩にのりてうつる、第一早瀬丸といふ、ささのよりは小し、江本の翁我等が爲にとて、乗りて來れり、これも志厚し、我等どのりかへて歸りぬ、九時三十分發す、我は元橋氏と甲板の上に席を設けて、遠近の景色を見つゝ、笹ヶ谷へ行きたる者は、昨日萩へ出で、今日は一坂をふみしだきて、歸路にあらん、小野田萩へ行きたる者は、どくに歸りたらん、恙なきかなと語りてをり、舟人のもてあしもよし、茶菓子などもてきぬ、こも彼翁の賜ならんか、いさゝかかへししぬ、二時四十分相原沖へつきて、又舩に移りて出づ、かこ舟もやひして帆をあぐ、見ればやれにやれたるつづれなり、思はざるごと、て、舟こぞりて笑ひとよむ、ある人、

ばろくやオホ、ウハ、からくと唐櫓にひく、笑聲かな、どうちあ

げたり。唐櫓に響くのみかは。龍の宮にも聞えつべし。と人のいひければ又。

からくくと笑ふ門には福來るそれだから舟めで寶船と舟祝しつるもをかしかりけり。されど此寶船なづみにあづみてはかくしからず。漸く陸に近ければ。さきに憩ひつる家の主待ちつけたり。生徒等見るより。鶴よくとて又笑ふ。いかなればかと思ふに。此主おしも頸もいとう長きが似たりければ。早う此あだなを負はせつるなるべし。岸に上れば。此人いと早うおはしつるものかな。恙もおはしまさで。めでたかりつるあそいふ。生徒ども笑ふこと極なし。

行きつるも歸りきつるもよかりつる聞つる見つるをかしかりつる。と心の内に走じたれども。あまりあざれたるやうなれば。言には出さず。

一人たにつゝ。かもあらてかへりきてふたゝひこゝに相原の里と獨ごちて又其家に入りて。制籠うちひらきて。暮れぬほそにといそぎ立つ。三時をぐる比なりけり。軍歌勇ましくうたひあそして。走るがごとく行く。七時に龜山の麓あるなつかしき學校に入りぬ。宿直の者舎監なぞ出で來つ。かたみに恙なきを

祝ふ。他所へ行きけるものはと問へば。いづれも事なく歸れりといふうれしき事の限なり。さて生徒をたちあらべて。別を告げらく。それ此度の旅は。はつかに六日あれども。五つの幸ぞありける。一には。あやにかしき神々に。見ゆ奉りしこと。二には。いづかたにても。いと厚き人の情けを受けしこと。三つには。いみじく知識を交したること。四つには。後の語り草になるべき見物。いと多かりしこと。五つには。日々に天氣うらゝかなりしこと。これなり。これも。尊き神々の御靈ちはひて。まばらせ給ふにこそは。あらめ。されば。いましらが。行未は。都府樓の遠うくしく。龜山の万歳とこそは。ぐべけれ。いざや。心しづかに。身のつかれをも。休めよ。とて。家に歸りぬ。

かりそめの旅には。われと筑紫路のかたれと。つきぬ事を。さね多き

そも此日記を物一つるに尊くもうれしくもゆかしくもど  
かしくもありつることをこたへこざりける人々にも聞  
かせていまひもれ同ト心に忍はんと思ふれみにもあら  
ず大方おれ旅路ににおふけあくも細戈千足の御國よまつ  
ろはせうちむかひしことさやぐ外國の夷らが事をいひつ  
ぎかたりつがん事さぬのさりにしあればこのかたりごと  
どかしまだちにてふりくたさりてこよらの昔の事のふみ  
をふみ忘たさつゞ行きと行はばなほ尊くもうれしくもを  
あしくもゆかしくも勇ましくもあらん旅路よあまがれな  
ん。さてのいた神々の尊さをいよくたふとみ皇國の麗い  
しさをいよく誇るにのみ昔人のかひくくさまめく

しさ。ゆゑしさ。雄々しさ。を鑑ともして。天地のかたくかため  
 磯輪上の秀眞國を。いやかたく守らんかたき心を。いよ  
 かたくもかためてん。と思ふに。なんありける。されは。言乃葉  
 の。霜にくちぬるもの。に。し。あれど。そ。ま。ま。や。り。つ。つ。人々の  
 と。き。め。に。た。づ。ね。た。ら。ん。に。は。こ。よ。に。も。な。ご。て。木。の。實。の。な。り  
 らんや。ん。と思ふ。を。たのみ。にて。梓。に。上。せ。て。頌。つ。こ。と。い。な  
 ぬ。明治の三十年といふ。と。の。き。さ。ら。ぎ。の。紀。元。節。といふ  
 け。こ。き。日。の。し。か。も。英。照。皇。太。后。の。國。喪。あ。き。玉。へ。る。日。雪。い  
 み。と。う。降。り。た。る。あ。し。た。梅。花。か。ほ。る。窓。の。下。に。石。井。盈。し。る。す。

明治三十年三月十八日印刷  
 明治三十年三月廿五日發行

非賣品

山口縣吉敷郡山口町大字太刀賣町第十五番屋敷

著作者兼發行者 石井 盈

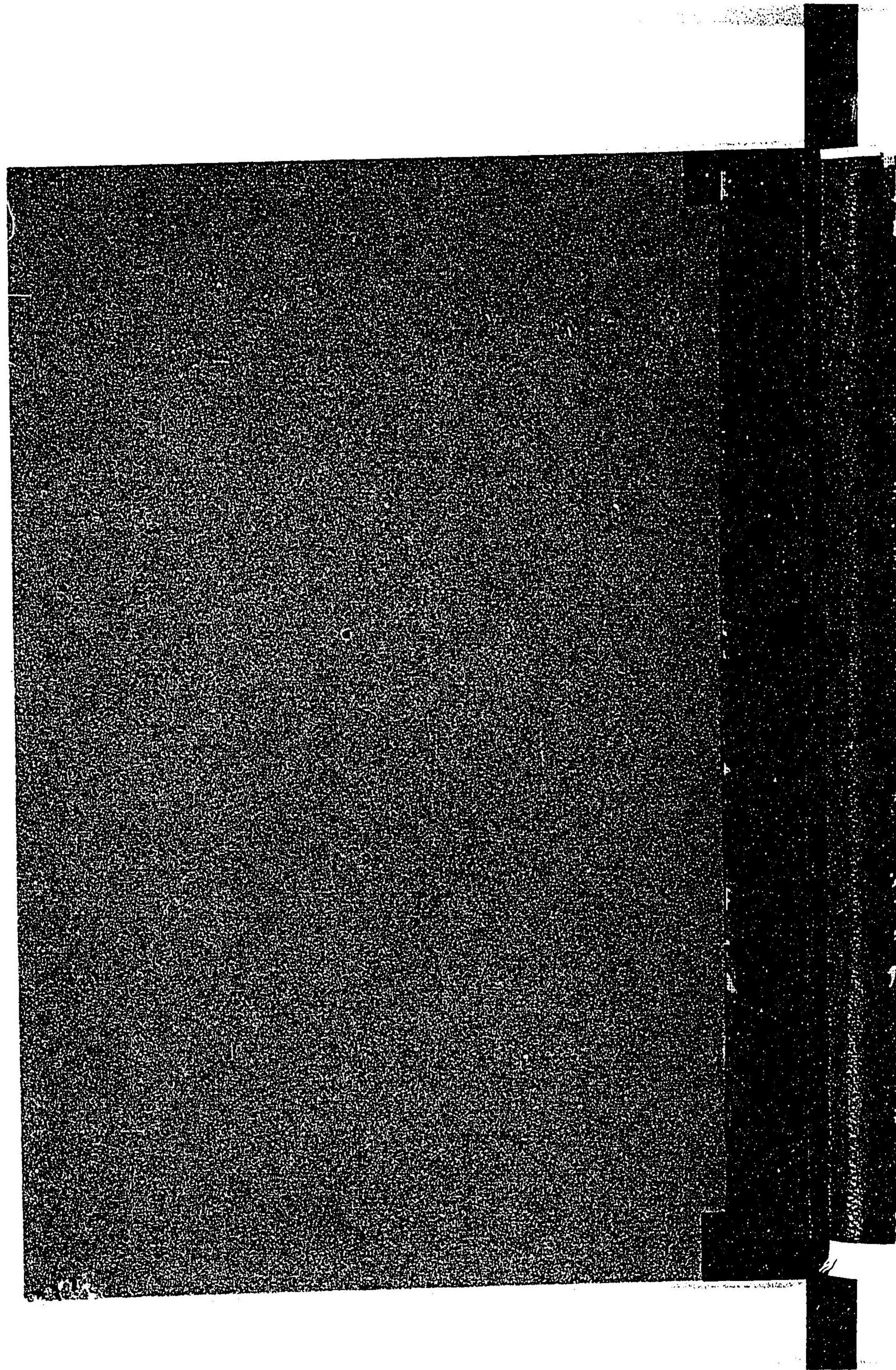
同 縣同 郡矢原朝田村第八十四番屋敷

印刷者 福田 龜太郎

同 縣同 郡山口町大字後河原町第四十三番屋敷

印刷所 防長新聞合資會社

A-10





Small white rectangular label with illegible text, located on the left side of the page, partially overlapping the black redaction bar.

Main body of text, mostly illegible due to blurriness and low contrast. The text is arranged in a single column on the right side of the page. There are some faint markings and a small white rectangular label at the bottom right corner.



つくし路, 修学旅行  
日記

国立国会図書館

026246-000-9

特49-47

つくし路 - 修学旅行日記 -

石井 盈 / 著

M30

ADC-3982



特